

ボクと博士と地球のおわり

茂呂 直人

続きまして、まもなく一週間後に迫っております、隕石による地球衝突についてのニュースです。隕石ははまだ地球に向かって落下を続けており、このままいけば七日後の夜明けごろ、地球に衝突するとみられています。隕石の衝突は大きな被害をもたらすとされ、おそらく、我われ恐竜は滅亡すると予想されています。

本日は「飛来物専門家」のプテラ教授にお越しただいています。教授、このたびの隕石についてどのようにお考えでしょうか？また今後どのようにしてすごすべきでしょうか？

えー：今回の隕石ですが、まちがいなくぶつかるでしょうね。わたくし、今日も空を飛んで確認してきたのですが、どんどん近づい

てきてます。めっちゃこっち来てます。今後についてですが、もう、これはあきらめて、どなたか大切な方と一緒にすごすのが良いかと思えます。我われにとって、最後の時間ですから

ピッ

ボクはテレビのスイッチを消した。

今日も変わらず、隕石衝突のニュースをやっている。

そして、今日も変わらず、隕石衝突の予報は変わらない。

とつぜん、「隕石がばらばらのこなごなになりました」とか、「やっぱりちがう方角に向かってました」とかにはならない。

わかってはいたけれど、それでも気になつて見てしまうものだ。それに、テレビを見る以外、とくにやることもない。そのテレビも隕石についてのニュースしかやっていないの

だけれど。

ボクの好きだったアニメ「地球防衛ザウルス」も、隕石衝突がわかってから、ある日とつぜん終わってしまった。なので、はたして「地球防衛ザウルス」は地球を防衛できたのかわからないままだ。まあ結局、「地球防衛ザウルス」も、隕石を前に何もなすすべがなかったみたいだけれど。

でも、それもしょうがない。地球のおわりにアニメをつくる恐竜なんていないのだろう。みんなそうだ。ちょうど一ヶ月前、隕石衝突のニュースがテレビで流れると、大人は仕事をやめてしまったし、子どもは学校に行かなくなってしまう。いくら仕事や授業がたいくつで、「隕石でも落っこちて、全部なくなっちゃわないかな」なんて思っている、地球まるごとなくなっちゃうとなると、話は別だ。

じゃあ、みんなどうしているのかというと、

テレビで言っていたみたいに、「大切な方」と最後の時間をすごしているらしい。

「大切な方」というのは、ほとんどの恐竜にとっては「家族」のことだ。

家族というのは、やっぱり特別な存在で、みんな地球のおわりにだれとすごすかとなったとき、まっさきに思いつくものだ。

じゃあ、ボクも家族とすごしているかというのと、そうではない。

なぜなら、ボクには家族がないからだ。

お父さんとお母さんは、ボクがまだ小さいころに火山の噴火に巻きこまれて死んでしまった。その後、ボクは親戚の家にあずけられていたけど、隕石衝突がわかってから、親戚のおじさんおばさんは、ボクを残してどこかへ行ってしまった。でも、それもしようがない。だってボクは家族じゃないし、「大切な方」でもなかったみたいだから。

だからボクは、家でひとりつきりですごす

ことになった。

地球誕生以来、最も真面目なテイラノサウルスと言われてきたボクは、地球のおわりだろうと変わらず学校に通っていた。だけど、次第にだれも来なくなって、最後は先生も来なくなって、教室にはボクひとりになってしまった。

だからボクも学校に行かなくなった。学校をサボったのは、生まれてはじめてだった。

学校をサボってだらだらテレビを見たり、好き放題してすごすのは、意外と楽しいものだった。少し後ろめたい気持ちはあったけれど、そもそも学校はやっていないし、なににより「はじめて」何かをするということが、ボクをどきどきさせた。

はじめての二度寝に、はじめての朝寝坊、はじめての夜更かしと、それからのボクは活動的にはじめての日々を送った。

しかし、隕石衝突を一週間後にひかえた今

日このごろ、とうとうすることがなくなってしまう。

こうなったら、とことんはじめてのことにチャレンジしよう。

ボクは何もすることの残っていない家を出ることにした。

残り短い恐竜生だ、せつかくなら思う存分楽しまなくちゃ！

ボクがまず、生まれてはじめてすることにしたのは「狩り」だ。

ティラノサウルスをはじめとする肉食竜は、草食竜を狩ることで、お腹をいっぱいにする。

しかし、ボクはまだ子どもだから、自分で獲物をつかまえたことがない。

学校の授業では少し習ったけれど、ボクが獲物をいかくするときの雄叫びをあげるとクラスメイトからは「恐竜なのに全く恐くない」とか、「小鳥が鳴いたのかと思った」とかさんざんからかわれるし、先生からは「真面

目にやってください」とよくしかられた。

だけど、宇宙一真面目なテイラノサウルスであるボクだ。上手くいかなはずがない。きつと十匹くらいすぐつかまえられるはずだ。

ボクは獲物をさがして、草原まで来た。

すると、さっそく発見！

少し先の草むらに、ボクと同じくらいの、子どものステゴサウルスがいた。

よし、あの子にしよう！

ボクはなるべく気づかれないようにそっと近づいた。そして、獲物のかげをふむと同時に、思いつきり雄叫びをあげた。

「ピヤアアアアー」

ボクに気づいたステゴの子は、びっくりして動けずにいる。

よし、このままガブツとかみつけば…！

ボクが口を大きく開けたそのとき

ドシンッ

なにかが衝突して、ボクはおもいつきりふ
つとんだ。

顔を上げると、目の前には二匹のステゴサ
ウルスがいた。さっきの子のお父さんとお母
さんだろうか。

お父さんのほうが近づいてくると、ボクに
向かって雄叫びを上げた。

「ギャオオオオオー」

学校で先生がやって見せた、お手本のよう
な雄叫びだ。

「ゴメンナサイ」

ボクはたまらず謝ってしまった。ボクはス
テゴサウルスに謝罪した、史上初のテイラノ
サウルスになってしまったかもしれない。

ボクによわよわしい声を聞いて、するどく
くならみつけていたステゴのお父さんの目は、
とたんにまるくなって、悲しそうにボクを見
つめた。

「もう家族でいられる時間もわずかしかない

んだ。キミも家族のところへもどりなさい」
そう言うと、ステゴの家族はならんで草むらの中に消えていってしまった。

ボクはひどくみじめな気持ちで、草原をトボトボ歩いた。

そんなこと言われても、ボクにはもどる家族がいないんだ。

でも、ステゴのお父さんが言ったことももつともだ。今度は家族のいない、ボクみたいなひとりぼっちの恐竜をねらおう。

ボクはそう心に決めて、そのまま草原をぬけて、その先の森の中に入っていった。

森の中をしばらく歩くと、リンゴの木の下で、一匹のトリケラトプスが、ぐうぐういびきをかいて居眠りをしていた。

これはチャンスだ！

からだはとても大きいけれど、ボクよりだ
いぶ年上のおじいさんみたいだし、まわりに

だれもいなさそうだ。

ボクはトリケラトプスを起こさないように、そーっと近づいた。

目の前まで来て、いざかみつこうとしたそのとき

ポテン

トリケラトプスの頭にリンゴが落っこちた。

「ふわああああく」

あともう少しのところだったのに。

トリケラトプスは気のぬけたあくびをして、目を覚ましてしまった。

「なんだね、キミは？」

ボクに気づいたトリケラトプスは、まだ眠そうな目をして言った。

「ボクはテイラノだよ。今からあなたを食べるんだよ」

ボクはあきらめずに言った。

すると、トリケラトプスは、のそりと起き

上がった。

「そうか：それはこまったのう。もう少しだけ待ってほしいんじゃないが」

「待ってって言われて待つテイラノはいないよ」

このトリケラトプスのおじいさん、今から食べられるかもしれないというのに：さてはまだ寝ぼけているな？

ボクが目の覚めるような雄叫びを上げようとしたときだった。

「ワシにはやらなきやいけないことがあるんじゃない」

トリケラトプスは、ようやく眠そうにしていた目を大きく開いて言った。

「やらなきやいけないことって？」

「ワシはトリケラ博士。今から地球を守らなきやならんんじゃない」

ボクはあっけにとられてしまった。

「なに言ってるの。隕石の衝突はもう決まってるんだ。専門家の先生だってあきらめて：

「ところで、キミはひとりかい？」

「そうだけど」

「キミ、地球防衛ザウルスは知つとるかいかい？」

「もちろん、知ってるよ！」

「じゃあ、今日からキミも地球防衛ザウルスじゃ。ワシと一緒に地球を守ろう」

ボクは博士のせなかを追って、森の中を歩いていった。

「地球を守るって、いったいどうするの？」

「それをずっと考えていたんじゃないや。ずっと木の下で考えていたら、気づいたら寝ておったんじゃないな」

ワツハツハ

そう言って博士は盛大に笑ったけど、ぜんぜん笑いごとじゃない。

「それじゃあ何も策はないってことじゃないか！さてはボクに食べられないためにウソを

ついたな」

「いや、何も策がないってことではないぞ。今からとっておきを見せてあげるから」

ほんとかなあ？

ボクは疑っていたけど、とにかくついていくしかない。ボクは博士の進むままに、どんな森の深くへと入っていった。

しばらく歩くと、急に開けた場所に出た。

「ここがワシの研究所じゃ」

そう言って博士が案内したのは、森の中にぽかりと、それこそ隕石でも落ちたみたいにもろく木々が切り取られた場所だった。向こうには博士の家だろうか、鳥の巣みたいに木の枝で組まれた建物がある。ということ、ここは庭なのかもしれない。あたりには、わけのわからない部品みたいなものが、あちこちに転がっている。

「ここでワシは今、ミサイルを作っている」

「ミサイル！？」

「ミサイルで隕石を打ち落とすんじゃない」

ボクはまた、あっけにとられてしまった。

だって、そんなことできるの？ やっぱりボクに食べられないためにウソをついたな。

「これ以上からかうとほんとに食べちゃうよ

」

「ワシは本気じゃよ」

そう言っつて、博士は空を見上げた。

「隕石が衝突する前の夜、ここでミサイルを打ち上げる」

博士はじつと空をにらんでいる。その目は隕石を見すえているみたいだ。

「ワシを食べるなら、そのあとにしてくれ。

そのあとなら、別に構わん」

「ほんとうに？」

博士は視線を空から落ととして、ボクを見た。

「ああ、約束する」

まあ、そこまで言うなら付き合っつてあげてもいいかな。だって、ミサイルを打ち上げるなんて、はじめてでわくわくするじゃないか。

「わかったけど、じゃあボクは何を手伝えればいいの？」

「キミには、このミサイルの発射台を組み立ててほしいんじゃない」

そう言って博士が指さした先には、まるですでに何かをこわしたあとのように、部品がバラバラに転がっていた。

「実は、もう設計図はできているんじゃない。だがなあ：見たまえ、この立派な前足！立派すぎてちまちました作業には向かんのじゃ。それにくらべて、キミの前足のなんとちまちましたこと！」

「さてはバカにしているな」

ボクはキツと前足のツメをつきたてた。

「すまんすまん、キミの前足はだなあ：実際に器用そうじゃ。きつと、この発射台を作るためにあるんじゃない」

博士はボクの前足をにぎった。

「キミの前足は、地球を救うためにあるんじゃない」

地球の命運は天才テイラノサウルスのキミにかかっている、なんて言われたら手伝うしかない。この日からボクは、博士の研究所でミサイルの発射台作りをはじめた。本当にこれで隕石を打ち落とせるのか疑問だったけれど、家についてもすることがないので仕方ない。

発射台作りは博士の指示のもと、ちまちまして部品とちまちました部品をくつつける、実にちまちまして作業だった。

そしてこの作業が、思ったより楽しい。進めていくうちにだんだんと上達して、部品はボクの手の中で、思ったとおりにぴたりとくつつくようになった。

もともとボクは学校の狩りの授業でも、雄叫びの成績はさんざんだったけれど、ツメとぎの腕前はだれよりも上だった。先生からは「そんなにするどくしてどうするの？」と言われるほど上手だったし、あまりにするどいツメは、手をついたありとあらゆる場所やも

のに食いこんで、日常生活に支障をきたすほどだった。

この細くするどいツメが、ちまちました作業に向いていたらしい。発射台の組み立て作業は順調に進んでいった。

そんな作業中のあるときのことだった。

「いったん休憩にしよう。こういうのは適度な休憩が大事なんじゃないや。そうじゃ、散歩に行くでしょう。それに少し手伝ってほしいこともあるんじゃない」

そう言う博士に、なかば無理やり連れられて、ボクたちは森の中へ散歩に出かけた。

森を歩くボクは、目の前が見えないほど大きなカゴをかかえていた。カゴは博士からわたされたものだ。

森の中には、今まで気にしたことがなかったけれど、色々な花や草木がしげっていた。

博士は森になっている木の実を見つけると、

「これは食べられる」

「これは食べられるけどマズイ」

「これは食べたらマズイ」

などとぶつぶつ言いながら、食べられるしオイシイ木の実だけをもぎ取って、ボクの持っているカゴにぽいぽい放りこんでいった。

「木の実なんか集めてどうするの？」

「博士というのはとても頭を使うんじゃない。だからあまい木の実が必要なんじゃ」

「この前は木の下で眠ってたけどね」

ボクは博士をからかったけど、博士は続けて言った。

「これはキミのためでもあるんじゃないぞ。組み立て作業も、とても頭を使うじやろう？」

博士の言うとおりで。組み立て作業は、天才的な頭脳をフル回転させるので、とてもエネルギーを使うのだ。

博士は次々と木の実をもぎ取って、気づくとカゴはいっぱいになっていた。

ボクは木の実をひろった帰り道、ずっと気になっていたことを博士に聞いてみた。

「そう言えばさ：博士って家族はいないの？」

「

博士はボクが会いに行くといつもひとりでいたし、発射台作りをしているときも、だれも訪ねて来なかった。

「家族はいたよ。奥さんと娘が一匹。でも、二匹ともテイラノサウルスに食べられてしまったよ」

えっ！？

ボクはおどろいて、あやうく持っていたカゴを落としてしまいそうになった。

だって、じゃあなんでボクとのんきに木の実なんかひろっていられるのさ。ボクはテイラノサウルスだぞ。博士の大切な家族を食べってしまった恐竜じゃないか。

ボクは博士の気持ちが変わらず、その場で立ち止まってしまった。

気づいた博士がふり返ると、ボクの顔を見

るなり盛大に笑った。

「ワツハツハ：なんて顔をしとるんじや！キミはおかしなテイラノサウルスだなあ！」

だって、おかしなのは博士のほうだ。地球のおわりを、大切な方とすごすどころか、よりによってテイラノサウルスのボクと：

「ワシの家族を食べたのはキミではないじやろう？それにじや、テイラノサウルスがトリケラトプスを食べる、これは当たり前のことじや。自分がトリケラトプスである以上、食べられてしまうのは仕方のないことじや」

博士の目には、ボクの顔が映っていた。博士はその目を、やがて空に向けて言った。

「しかしじやな、なんだ隕石ってのは！まったくわけがわからんよ。隕石で地球まるごとなくなってしまうくらいなら、ワシはテイラノサウルスに食べられてしまいたいね」

博士はやっぱり空をにらんでいる。

「そしてあの世で家族に会ったとき、ワシもテイラノサウルスに食べられてしまったよと、

同じように語りたい。しかし、ワシは食べられる前、そのテイラノサウルスと仲良くなつたし、一緒に地球を救ったんじゃないかと伝えたい。きつとおどろくじやろうなあ。おかしなテイラノサウルスもいたもんだと、笑ってくれるかもしれないなあ」

そこまで言つて、博士はまた、ワツハツハと盛大に笑つた。

研究所にもどるころ、あたりはすっかり暗くなつてしまつていた。

「遅くなつてしまつたから今日はもう帰りなさい。また明日」

「明日も来ていいの？」

ボクは何だか不安になつて聞いてしまった。「当り前じゃ。でなけりやだれが発射台を作るんじゃない」

そう言つて、博士は前足をこちらに向けてふつたので、ボクも前足をふり返した。

次の日、隕石衝突を二日前にして、とうとうミサイルの発射台が完成した。

「すばらしい！キミのおかげだ、ありがとう

」

ボクと博士は、立派な前足で固い握手を交わした。ボクのするどいツメが博士の立派な前足に食いこんだ。

「イテテ：あとは肝心のミサイルじゃが、もちろん明日には間に合いそうじゃ。あとはワシが準備するから、今日は帰って、明日に備えて休むといい」

博士はそう言ったけど、ボクだって一緒に手伝いたい。

「ダメじゃ。それにワシはちと出かけなくてはならん。そのかわり、明日の夜、必ず来るんじゃぞ。寝坊するなよ」

寝坊なんかするもんか。だってボクは、地球上で最も真面目なテイラノサウルスなのだ。

次の日の夜、ボクと博士は、発射台の前に

いた。

上空では、青い炎をまとった隕石が、ごうごうと光の尾を引いてこちらに向かっている。

「博士、ところでミサイルはどこ？」

「ミサイルはだな：これじゃ」

そうやって、博士は自分を指さした。

「えっ、どういうこと？」

「ワシ自身がミサイルになるんじゃない」

そう言うと、博士は発射台にのそのそよじ登り、発射口の中にお尻を向けて入っていった。

「ではゆくぞ。さらば地球！さらば地球防衛ザウルス！」

博士は手元のスイッチをおした。すると、ものすごいけむりと共に、博士はいきおいよく夜空に向かって打ち上った。

ボクはすぐ近くに転がっていた双眼鏡をひろってのぞきこんだ。博士は隕石に向かって一直線に進んでいた。

そして、博士と隕石は夜空で衝突した。

博士の三本の角が隕石につきささり、そこからヒビが入り、隕石はこなごなにくだけ散った。

博士はそのまま夜空を進み続け、とうとう双眼鏡では見えない彼方に

ピピピピ：ピピピピ：ピピ

ボクは目覚まし時計を止めた。

なんだ、夢か。

ボクは布団から起き上がると、カーテンを開けて窓の外を見た。外はもう真っ暗で、空には星がよく見える。はるか向こうに、おそらく隕石であろう青白く光った線が見え、その周囲の空があやしく紫色に染まっている。

ボクはテレビをつけた。

テレビには隕石の映像だけが流れていて、右上に地球衝突までのカウントダウンがされている。衝突まで、あと五時間だ。

この感じだと、隕石は変わらず地球に向か

っている。

でも、ぜんぜんざんねんなんかじゃない。むしろ今更、隕石は衝突しませんなんて言われたほうがざんねんだ。だって、せっかく作ったミサイルが試せないじゃないか。

ボクは博士のもとへ向かうため、草原をぬけ、森の深くへと進んでいった。そろそろ研究所に着くというあたりで、先からまぶしい明かりとにぎわいが流れてきた。

着くと、研究所にはたくさんの恐竜たちが集まっていた。

「おっ、来た来た。発射台を作った張本人が来たぞ」

ボクを見つけた博士が言った。

「ここにいる恐竜たちは？」

「ワシが招待したんじゃない。まあ、みんなへのあいさつはあとにして、さっそくミサイルを打ち上げるぞ」

そう言うと、ボクを発射台までせかした。

「みなさん！大変お待たせいたしました。それでは、打ち上げを開始します」

博士の手元にはスイッチがある。

「3：2：1：：発射！」

博士は立派な前足でスイッチをおしこんだ。

ヒュ〜

高い音と共に、いきおいよくオレンジ色に光る弾丸が飛び出した。

オレンジは、暗い夜空をぐんぐんのぼっていき、隕石に向かって一直線に速度をゆるめず：

ゆるめず：

いや、どんどん速度をゆるめて：

ゆるめて：

夜空へ消えていった：：：そのとき

ド〜ンツ

オレンジが消えた夜空を中心に、色とりどりの火花が飛び散った。

これは、花火だ！

博士が打ち上げたのは、ミサイルなんかではなく花火だった。

「まだまだいくぞ」

博士は昨日ボクが持っていたカゴから、次つぎと木の実を発射台に放りこみ、スイッチをおした。

よく見ると、昨日は木の実でいっぱいだったカゴには、今は花火の玉が山になって入っている。

「わくきれい！」

「迫力満点！」

「夏に見る花火も最高だが、地球のおわりに見る花火は格別だなあ！」

花火を見た恐竜たちは、みんな空に向かって口をぽかんと開けて、感動の声を上げた。

花火が開くたび、みんなの楽しそうな顔が照らされて、夜に浮かび上がった。

博士は一度、花火の玉をつめる手を止めて、みんなに向かつて言った。

「みなさん、今日は『地球さよならパーティー』にお越しいただきありがとうございます。今日のために、オイシイ木の実もたくさん用意してあります。ぜひみなさん、地球のおわりに、楽しいひと時をおすごしくください」
言い終えると、博士はふたたびスイッチをおした。

夜空を色鮮やかな花火が彩り、ふだんは静かな夜をにぎやかす。

「大成功だね」

ボクは花火に負けない大声で博士に言った。

「キミのおかげじゃよ。キミも木の実を食べるといい。あ、テイラノサウルスは木の実を食べないのか」

「いや、あとでいただくよ。それより、やっぱりボクにウソをついていたんだね」

「それは：すまんかったのう」

博士は申し訳なさそうに言った。

「ここにいるのは、みんな、家族のいない恐竜たちなんじゃ」

ボクはあたりを見回した。たしかに、いろんな種族の恐竜たちがいる。だけどそれぞれが、肉食竜も草食竜もごちゃ混ぜになって、仲良くお話したり、おどったりしている。

「ひとりですごすのは、さみしいからもう」
博士は前足で花火の玉をころころ転がしながら言った。

それから博士はボクを、発射台を組み立てた天才テイラノサウルスだとみんなに紹介してくれた。すると、ボクの話の間こうとみんなが集まって来てくれた。

「ワシはまだまだ花火を打ち上げなきゃならん。ワシに構わず行ってくるといい。パーティーイーなんじゃ、存分に楽しみなさい」

博士がそう言うので、ボクはパーティーの輪の中に入っていった。

オイシイ木の実、きれいな花火、そして普

段は絶対話すことなんてない恐竜たちのおしゃべり、そのどれもはじめてで、隕石のことなんて忘れるくらいに楽しかった。

花火が打ち上る間、恐竜たちは大いにさわいだ。そして、花火が終わると、さわぎつかれた恐竜から、順番に眠っていった。

ボク以外のみんなが眠ってしまったころ、博士がボクのところに来てきた。

「パーティーは楽しかったかい？」

「もちろん！」

ボクは大きくうなずいた。

「花火も打ち上げ終わったし、約束どおり、ワシを食べても構わんのじゃぞ」

博士は空を見ながら言った。

「まだ隕石が衝突するまで、地球のおわりって決まったわけじゃないから。もしかしたら、ボクと博士だけが生き残ってたりして。そうになったら、博士のことを食べてあげるよ」

ボクがそう言うと、博士は空を見たまま、

ワッハツハ、と盛大に笑った。

ボクも博士にならって空を見上げた。

気づくと空が白んでいて、もうすぐ夜が明ける。上空には青く燃え光った隕石がたしかに近づいてきている。

今日は地球のおわりかもしれないのに、最高に楽しい一日だったな。

そう思うとなんだかおかしくて、ボクも博士にならって、ワッハツハ、と盛大に笑った。